

業績

業績

業績のご報告《主な経営指標の推移》

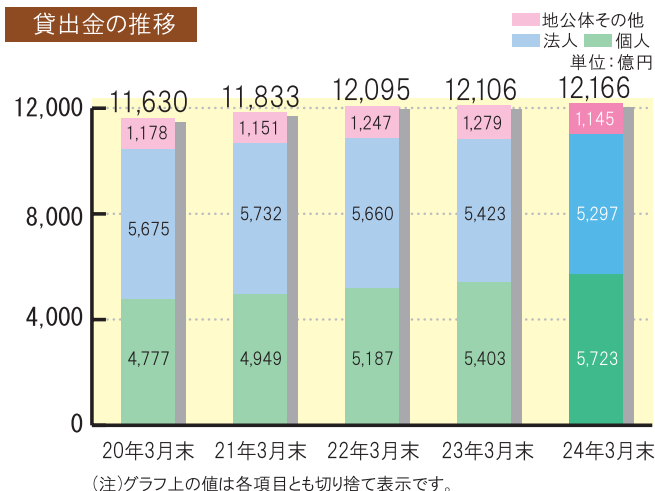
回次	第92期	第93期	第94期	第95期	第96期
決算年月	平成20年3月	平成21年3月	平成22年3月	平成23年3月	平成24年3月
経常収益	41,199百万円	39,812百万円	38,724百万円	37,802百万円	39,171百万円
うち信託報酬	0百万円	0百万円	0百万円	0百万円	0百万円
経常利益	2,926百万円	1,384百万円	5,915百万円	5,795百万円	5,297百万円
当期純利益	1,391百万円	3,347百万円	4,493百万円	4,203百万円	2,334百万円
資本金	54,127百万円	54,127百万円	54,127百万円	54,127百万円	54,127百万円
発行済株式総数	普通株39,308千株 優先株 1,200千株	普通株 39,308千株 優先株 1,200千株	普通株 39,308千株 優先株 1,200千株	普通株 39,308千株	普通株 39,308千株
純資産額	73,563百万円	78,562百万円	85,427百万円	82,119百万円	84,792百万円
総資産額	1,524,741百万円	1,538,924百万円	1,644,896百万円	1,767,318百万円	1,878,682百万円
預金残高	1,413,924百万円	1,420,442百万円	1,524,160百万円	1,640,759百万円	1,758,995百万円
貸出金残高	1,163,078百万円	1,183,386百万円	1,209,574百万円	1,210,680百万円	1,216,638百万円
有価証券残高	212,018百万円	242,526百万円	284,550百万円	365,488百万円	466,216百万円
1株当たり純資産額	1,718.16円	1,845.73円	2,020.72円	2,091.69円	2,187.01円
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額)	普通株式 8.00円 (-) 第1種優先株式 75.00円 (-)	普通株式 8.00円 (-) 第1種優先株式 75.00円 (-)	普通株式 8.00円 (-) 第1種優先株式 75.00円 (-)	普通株式 30.00円 (8.00)	普通株式 30.00円 (15.00)
1株当たり当期純利益金額	33.41円	82.94円	112.15円	107.06円	60.24円
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	30.75円	73.23円	99.46円	103.27円	60.24円
自己資本比率	4.8%	5.1%	5.19%	4.64%	4.50%
単体自己資本比率(国内基準)	8.60%	9.66%	10.49%	9.92%	9.82%
自己資本利益率	2.0%	4.6%	5.79%	5.20%	2.79%
株価収益率	26.58倍	9.81倍	9.38倍	8.87倍	18.67倍
配当性向	24.1%	9.6%	7.13%	28.01%	49.77%
従業員数 (ほか、平均臨時従業員数)	1,147人 (267人)	1,165人 (273人)	1,156人 (282人)	1,163人 (298人)	1,184人 (310人)
信託財産額	30百万円	3百万円	1百万円	1百万円	-
信託勘定貸出金残高	-	-	-	-	-
信託勘定有価証券残高	-	-	-	-	-

- (注) 1. 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
 2. 第96期(平成24年3月)中間配当についての取締役会決議は平成23年11月11日に行いました。
 3. 「1株当たり純資産額」、「1株当たり当期純利益金額」及び「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」(以下、「1株当たり情報」という。)の算定に当たっては、「1株当たり当期純利益に関する会計基準」(企業会計基準第2号)及び「1株当たり当期純利益に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第4号)を適用しております。
 4. 自己資本比率は、(期末純資産の部合計-期末新株予約権)を期末資産の部の合計で除して算出しております。
 5. 単体自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。
 6. 自己資本比率、自己資本利益率、配当性向について、従来は決算短信と平仄をとり、小数点第2位を四捨五入し小数点第1位まで表示しておりましたが、平成22年3月から小数点第3位以下を切り捨て小数点第2位まで表示しております。

貸出金

個人向け貸出が増加

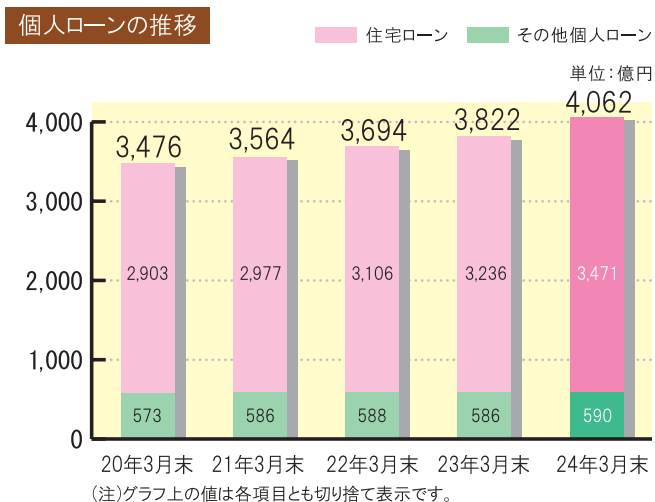
貸出金の期末残高は、住宅ローンを中心に個人向け貸出が好調に推移したことから、前期末比60億円増加の1兆2,166億円となりました。



個人ローン

住宅ローン残高が増加

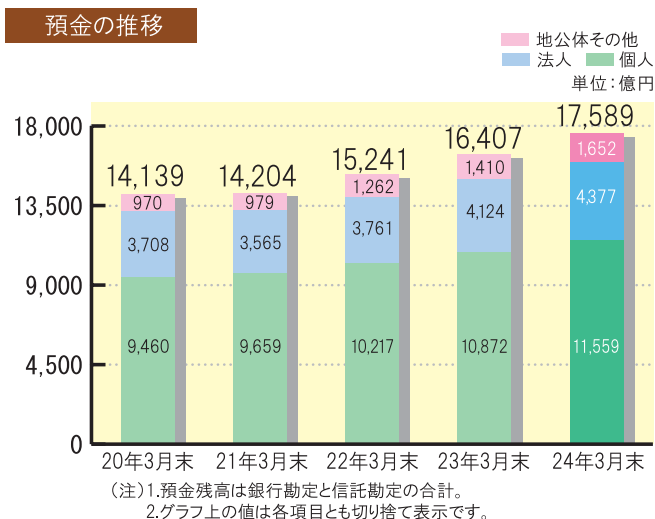
個人ローンの期末残高は、住宅ローンやカードローンが好調に推移したことから、前期末比240億円増加の4,062億円となりました。



預金

預金残高は1兆7,000億円台を達成

預金の期末残高は、個人預金が好調に推移したほか、法人、地公体預金も好調に推移したことから、前期末比1,182億円増加の1兆7,589億円と、1兆7,000億円台を達成しました。



業績

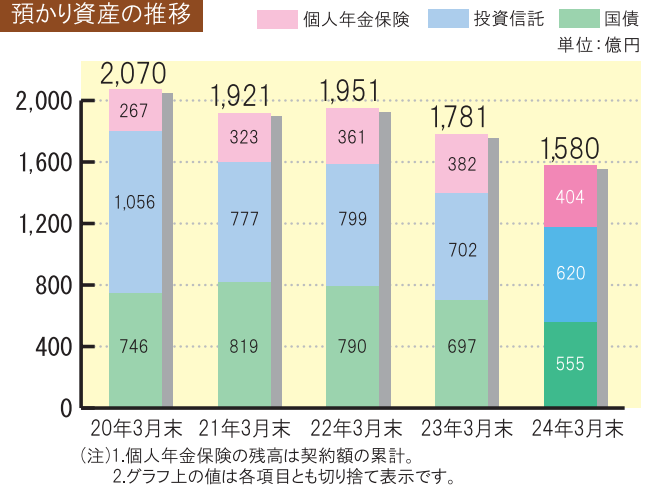
業績

預かり資産

個人年金保険が増加

預かり資産（個人年金保険、投資信託、国債）の期末残高は、個人年金保険が増加したものの、投資信託の基準価額低下や国債の金利低下などにより、投資信託と国債の残高が前期末を下回ったことから、前期末比201億円減少の1,580億円となりました。

預かり資産の推移



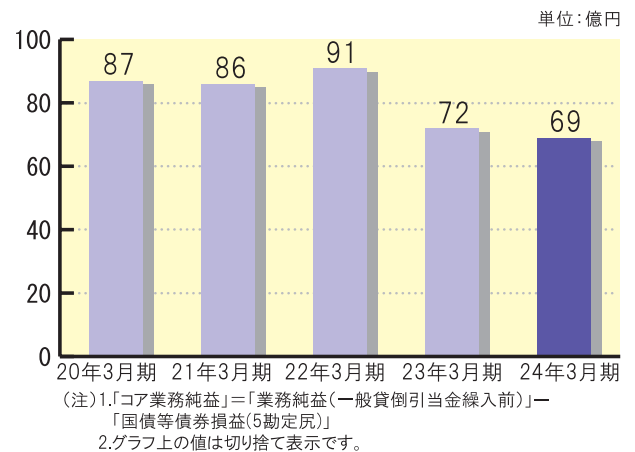
コア業務純益

コア業務純益は前期比減少

コア業務純益^(注)は、預金や貸出金、為替業務などであげた利益（業務純益）から一時的な変動要因を除いた、銀行の本来業務の収益力を表す指標で、事業会社の営業利益に相当する概念です。

今期のコア業務純益は、有価証券利息配当金が増加したものの、貸出金利息の減少などにより、前期比3億円減少の69億円となりました。

コア業務純益の推移

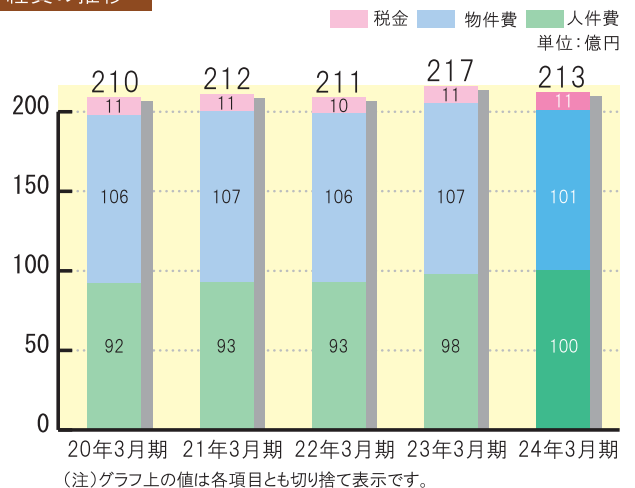


経費

物件費が減少

システム関連費用の削減による物件費の減少などにより、経費全体では前期を4億円下回る213億円となりました。

経費の推移

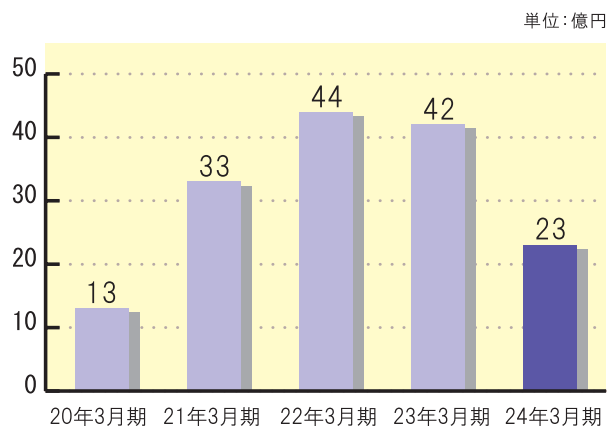


経常利益・当期純利益

有価証券減損処理費用の計上などにより減益

経常利益は、コア業務純益の減少や有価証券減損処理費用の計上などにより、前期を5億円下回る52億円、当期純利益は、法人税率引き下げに伴う繰延税金資産の取り崩しなどにより、前期を19億円下回る23億円となりました。

当期純利益の推移



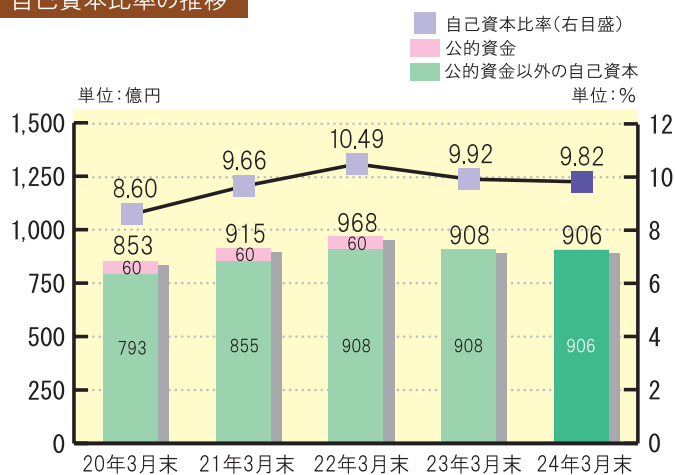
自己資本比率

十分な水準を維持

自己資本比率は、経営の安全性や健全性を図る指標の一つで、資本金等の自己資本が貸出金を中心とする資産規模に比べてどの程度充実しているかを表します。この比率は、海外に営業拠点を持つ銀行は8%以上、当行のように国内のみで営業している銀行は4% (国内基準) 以上が必要です。

当行の24年3月末の自己資本比率は、貸出金の増加等により分母であるリスクアセットが増加したことなどから、前期末比0.1ポイント減少の9.82%となりましたが、なお十分な水準を維持しています。

自己資本比率の推移



格付け

格付けは「A」(シングルAフラット)

格付けは、企業が発行する債券などの元金および利息の支払いが、約定どおり履行される確実性の度合いを公正な第三者である格付機関が評価し、その結果を記号で表したものです。当行は日本格付研究所の格付け(注)を取得しており、20ランク中上位から6番目となる「A」(シングルAフラット)の良好な評価を得ています。

(注)格付けは、「AAA」から「D」までの10段階です。「AA」から「B」までの格付けには、同一等級内の相対的評価として、(+)(-)の符号による区分があります。この符号も含めてランク付けした場合、格付けは20ランクに区分されます。

格付けの定義

長期債券格付記号	定義
AAA	債務履行の確実性が最も高い。
AA (+/-)	債務履行の確実性は非常に高い。
A (+/-)	債務履行の確実性は高い。
BBB (+/-)	債務履行の確実性は認められるが、上位等級に比べて、将来、債務履行の確実性が低下する可能性がある。
BB (+/-)	債務履行に当面問題はないが、将来まで確実であるとはいえない。
B (+/-)	債務履行の確実性に乏しく、懸念される要素がある。
CCC	現在においても不安な要素があり、債務不履行に陥る危険性がある。
CC	債務不履行に陥る危険性が高い。
C	債務不履行に陥る危険性が極めて高い。
D	債務不履行に陥っている。

業績

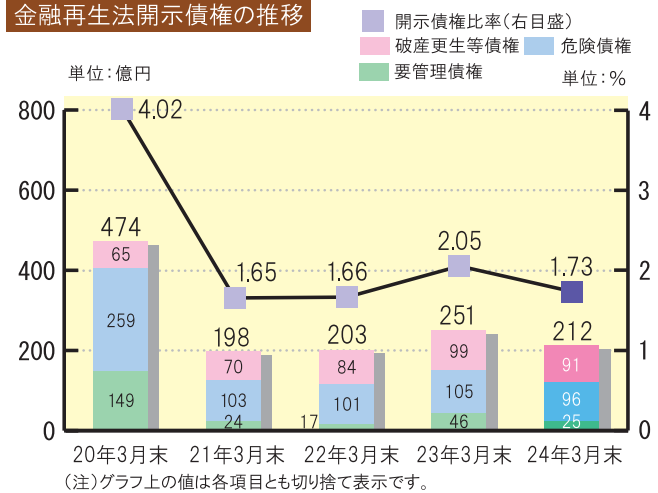
業績

開示債権

開示債権額・比率とも低水準を維持

金融再生法に基づく開示債権額は、前期末比39億円減少の212億円、開示債権比率は、前期末比0.32ポイント減少の1.73%と、引き続き低水準を維持しました。

金融再生法開示債権の推移



平成25年3月期業績予想

当期純利益は増益を予想

中期経営計画に掲げた諸施策の着実な実践により、当期純利益は増益を予想しています。

平成25年3月期業績予想

	25年3月期予想	24年3月期実績	増減額
業務粗利益	285	285	0
経常利益	50	52	△2
当期純利益	30	23	+7

資産の健全化

お取引先の経営改善支援、資産の健全化に積極的に取り組んでいます。

琉球銀行は、資産の健全化は経営の最重要課題であると認識し、お取引先の経営改善支援に積極的に取り組んでおり、資産の健全性を示す開示債権比率は、平成23年度末にて1.73%と低水準を維持しています。

しかしながら、最近の経済環境を踏まえすと、資産の健全性を確保しつつ、お取引先の事業活動の円滑な遂行ならびにこれを通じた雇用の安定にさらに積極的に取り組む必要があります。

例えば、自己査定における債務者区分でいう破綻懸念先や要注意先のほとんどは事業を継続しており、業績の回復や延滞解消があれば正常先に戻る可能性が十分にあります。こうした経営改善に取り組んでいるお取引先のご要望に対して、経営改善に向けた助言、経営改善計画策定の支援などに積極的に取り組むことで、お取引先企業の事業再生ならびに当行の資産健全化を図っています。

平成23年度については、362先の経営改善支援に取り組み、うち23先で債務者区分の良化を図ることができました。

当行は引き続き、お取引先の経営の改善、再生についての取り組みを強化し、県内の中小企業の事業再生ならびに発展に寄与してまいります。

自己査定の債務者区分と金融再生法に基づく開示債権

自己査定における債務者区分		金融再生法に基づく開示債権	引当率	引当額	保全率
破綻先	7億円	破産更生等債権 91億円	無担保部分の 100.00%	2億円	100.00%
実質破綻先	83億円				
破綻懸念先	96億円	危険債権 96億円	無担保部分の 49.53%	12億円	86.31%
要注意先	要管理先 39億円	要管理債権 25億円	無担保部分の 11.36%	2億円	41.72%
	その他要注意先 1,886億円	正常債権 12,046億円	債権額の0.53%	10億円	開示債権額 212億円 開示債権の保全率 87.34%
正常先 10,146億円	債権額の0.01%		1億円		
合計	12,259億円	合計	30億円		

破綻懸念先以下
に対する保全率
92.96%

引当・保全率の考え方

■破綻先・実質破綻先の債権

担保、保証等で保全されていない債権額の100%を償却・引当しています。

■破綻懸念先の債権

過去の貸倒実績率に基づいて個別債務者ごとに予想損失額を見積もり、予想損失額に相当する額を個別貸倒引当金として計上しています。

■要管理先・その他要注意先・正常先の債権

過去の貸倒実績率に基づき、要管理先の債権で3年、その他要注意先および正常先の債権で1年の予想損失額を見積もり、一般貸倒引当金として計上しています。

■保全率

担保・保証等および貸倒引当金で債権額の何%をカバーしているかを表します。

(注) 1.表上の値は各項目とも切り捨て表示です。
2.平成24年3月末現在。

自己査定債務者区分と金融再生法開示債権の定義

◎ 自己査定の破綻先・実質破綻先＝金融再生法の破産更生等債権

破産、清算、会社更生等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権、およびそれと同等の状態にある債務者に対する債権です。

◎ 自己査定の破綻懸念先＝金融再生法の危険債権

現状では事業を継続しているが、実質的に債務超過の状態に陥っており、業況が著しく低調で貸出金が延滞状態にあるなど、今後、経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に対する債権です。

◎ 自己査定の要管理先＞金融再生法の要管理債権

■自己査定の要管理先

債務者の経営再建または支援を図ることを目的に債務者に有利となる取り決め(約定条件の変更等)を行った貸出金や元金または利息の支払いが3カ月以上延滞している貸出金のある債務者です。

■金融再生法の要管理債権

債務者の経営再建または支援を図ることを目的に債務者に有利となる取り決め(約定条件の変更等)を行った貸出金や元金または利息の支払いが3カ月以上延滞している貸出金です。

自己査定における債務者区分は「債務者単位」、金融再生法に基づく開示債権額は「債権単位」です。例えば、一人の債務者に2件の貸出金があり、うち1件の貸出金が3カ月以上延滞している場合、自己査定では2件の貸出金合計額が要管理先に区分されるのに対し、金融再生法では要管理債権と正常債権(要管理債権以外の貸出金)にそれぞれ区分されます。

◎ 自己査定:その他要注意先(要管理債権のない要注意先)

貸出条件に問題のある債務者、貸出金等が3カ月未満延滞している債務者、財務内容に問題のある債務者などです。